穴吹の川

令和三年六月十七日
作詞　大中臣正比呂

（一）

都には　柴垣巡る　荒ら屋の
屋根に苔むす　静けさも

（二）

戦の先は　穴吹の川
落人は　八島も遠き　山里に
追いて　慕ふは　公達よ

（三）

恋人の峠　穴吹の川
悲恋には　袖を分かちて　返す坂

京の大路も　消え失せて
吉野に注ぐ　穴吹の川

（四）

時を経て　生まれ変わりし　卯建の家
愛の暖簾を　掛けて待つ
美馬を潤わす　穴吹の川

【解説】

徳島県美馬市から剣山への山中に、恋人峠はある。
八島の合戦に敗れた平家の公達の一部は、八島から遠く離れた険しい山中に逃れたと云う。
その貴族の若者を慕い、後を追いかけた女御は険しい峠の難所に阻まれて、やむなく引き返さざるを得なかったと云う。
悲恋の峠なのだ。
平家にとっては勝てる戦であったから、女達も従軍したのであろう。しかし、もう都大路の家に帰ることはできない。例え、あばら屋であったとしても、長年住み慣れた家には戻れない。
そういう悲しい人生もまた糧として人は転生する。

後の美馬の町は藍（愛を掛ける）の産地で、隆盛を誇った。
美馬の町は穴吹川に沿って広がる。
特長のある、卯建という防火壁を持つ家屋は、豪商の家である。
「うだつの上がらぬ男」というが、この卯建から来る。
今は、ここを訪ねれば「うだつが上がる」観光地である。
その穴吹川は四国最大の河川、吉野川に注いでいる。
穴吹川は素晴らしい清流であり、酒造りの水に適する。

諸兄よ、清酒「穴吹川」を召し上がれ。
夏は、冷やして聞こし召せ。